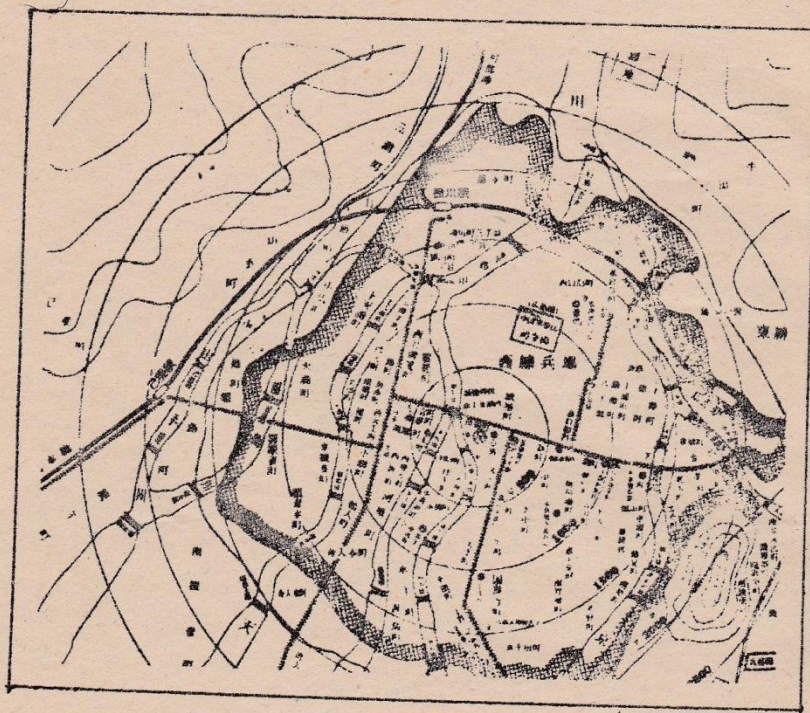


若い世代の語る

＝ 父母教師の戦争体験 ＝



S.52 広高校第一学年編

若い世代に語る——オの号——

工 父母の語る戦争体験

● 父の手記

- 各自が決めた進路に向って学べ / 大田史代 1
- 地獄の様はかくあらん / 中川圭子 1
- 原爆投下 / 住吉隆義 7
- 忘れもしない三月十九日の空襲 / 村田哲士 8
- 今も身震りする空襲体験 / 柳沢平兵 10

● 母の手記

- お国のためト? / 川本ひとみ 3
 - 戦争のおゴエ、哀れえを思う / 坂口信義 6
 - たれられなヒラジオの叫び声 / 住吉典子 9
 - 恐ろしかった兵の空襲 / 古本征子 11
- 生徒の手記
- 戦争、ムリヤえすまい / 高沢留美 3

II. 映画「ひろしま」を見て

- 真実を教える教育を / 富永真世 5
- 戦争はすべこの国民を不幸にする / 岡光淳 13

- クラスの人にまが知ってもらいたい / 清水裕美 14
- 今日の気持ち忘れぬよう / 久保良子 15
- 疑問を学書で解かぬば / 島圭典江 15
- 思い知らされた戦争のかわくえ / 梶本徳考 16
- 平和を友好的条約で守ろう / 永田泰子 16
- 世界に知らせよう原爆の悲惨さを / 服部雅博 17
- 許されないうる心 / 栗田明美 17
- 核使用 核保有、反省すべし / 中森寛美子 18
- 原爆あんなものじゃなかったという母 / 古沢秀俊 18
- 積極的に行動して / 天満伸子 19
- 力を合わせて平和を築こう / 河原良美 19
- 原爆投下、許せなッゾ / 福岡真弓 20
- アメリカカモニの映画見るべきだ / 堀尾和友 20
- 原爆投下、しかたないはすまされない / 鎌田淳 21

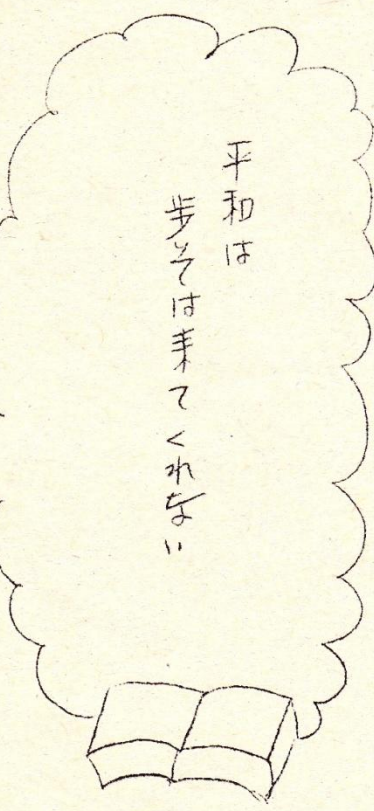
父母が語る戦争体験
 江野 馨 / 加藤 久男
 今なお息子をさがし続ける老婆
 石橋 伸子

III. 講演の感想

| | | |
|----------------|--------|----|
| 人回らしい人間になりた | 松浦 高り | 23 |
| たれまはならない日本人の心 | 平賀 伸一 | 23 |
| あなまは存せ私たちに話すのめ | 江野 馨 | 24 |
| 無知ほどこわいものはない | 山根 直子 | 24 |
| 広島的心を世界の心に | 脇 浩司 | 25 |
| 愛より強いものはない | 吉田 順子 | 26 |
| 真実を採求する人間に | 吉岡 孝子 | 26 |
| 原水爆の廃絶を | 上野 美恵子 | 27 |
| 戦火の母の愛にどうたれる | 武政 美 | 27 |
| なぜ核兵器を保有するのか | 奥 和恵 | 28 |
| 期待される私たちの生ま方 | 藤田 恵子 | 28 |
| 二の子を残して | 永井 隆 | 29 |
| 美しい顔 | 須田 卓雄 | 37 |

IV. 教師の戦争体験

| | | |
|--------------|--------|----|
| 戦争は知らなけれど | 長井 正和 | 33 |
| 私の幼年時代 | 藤岡 淳 | 34 |
| 奥田疎南にて | 柿沢 吾三郎 | 34 |
| 忘れてはならぬ中学時代 | 谷岡 勲 | 35 |
| 敵之子を再び戦場に送るな | 森川 正元 | 36 |
| 私と八月六日 | 菅原 威 | 44 |



〈表紙〉安長 輝之
 〈目次カト〉菅原 威
 〈筆耕〉上野 美美

各自が決めた進路にむかって学べ。(父の手記)

太田 史代

旧制中学5年生(昭和18/19)の時、「陸の予備士官学校S中学」と題して、私たちの中学生が特別幹部候補生に200人位(?)志願したことを新聞が報じていた。(この特別幹部候補生は、戦争が激しくなるにつれて、指揮官の戦死者も多くなった為、設けられたもので、大学・専門学校の学生、生徒は将校に、中学生(旧制)は下士官に短期間になり、戦場に送られていた。)その日、登校すると特別幹部候補生の志願の新聞のことが話題となり、下級生ばかり志願して私たちのクラスはいかなかったため、クラス担任の立場が苦しく、何か私たちに志願するようにとすすめられるにちがいないと級友たちと話しあっていた。放課後、教室に集るようにと連絡があり、先生をまちながら私たちは、多分、クラス担任は「お前たちは最上級生でありながら持幹に志願せず何事だ、下級生を見習え、今朝の新聞を見たか」と叱られることと信じていた。ところが担任はしづかに「今朝の新聞を見たと思うが、国につくす道はいろいろある、各自が決めた進路にむかって学べ」といわれただけであった。当時は、旧制中学校以上の学校には将校が配属され、軍事教練が行なわれ、小学校の教師は、少年航空兵、少年戦車兵等へ子供を志願させ、中学校教師も甲種予科練陸士、海兵、特幹等へすすめていた。こうし

た戦争へのうずの中で私のクラス担任のような発言は当時としたら非国民と呼ばれるものであった。こうした激流の中で、こうした異常の中で、じつくりと見わたし見つめて発言し行動のできた私のクラス担任を今でもことあることに思い出す。あらゆる角度から物が見えること、教育の重要さ、自由に物が言えることが大切だと思いが……。私も間もなく現役として入営し、朝鮮半島で、幹部候補生の伍長で終戦をむかえた。

地獄の様はかくあらん。(父の手記)

中川 圭子

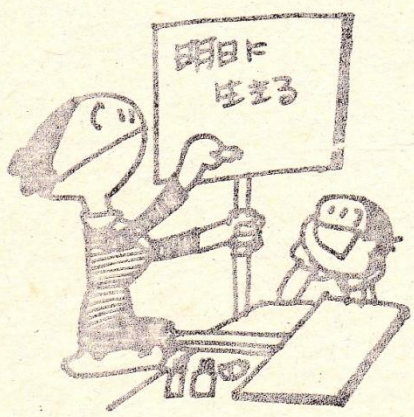
昭和20年8月6日 昨夜来の連続的な空襲も漸く治まり静かな朝を迎えた。午前6時起床ラッパに起されて、一日が始まる。午前7時、けたたましいサイレンの響きとともにまた空襲警報、数機のB29が銀翼をつらねて西の空へ飛伏去った。警報解除、ほっとして防空壕から出て兵舎に帰り、兵器点検の学習を始めた。と、その時、瞬間の閃光が眼を射て突然の暗黒の世界にさそいこまれていた。どこがらともなくすさまじい地響をたててせまりくるごう音に、30数名の戦友とともに戸口と思われる方向に走り出た。その瞬間、頭から押えつけられる空圧力と兵舎の倒れる勢いの圧力に、身体は宙に浮き、もんどり打って、コンクリートの溝に落ち

（うつむいた姿勢で）その上から、落下する反の破片と、
 樟の木の枝に一命をとりとめていた。教分の暗やみは漸く
 明るさをとりしとし、起き上って顔面を見まわすと、何た
 ら様か血だらまの戦友は地上にうめき、阿鼻叫喚、太田川
 を横切る工兵橋の方へよろめき、助けを求めて走っていた。
 幸い傷一つない自分は、一瞬とまどったが、無事な勇兵數
 名と互いに呼び合い、どこからともなく発する火の手の
 満文に積極的に向った。最も危険な所、又最悪の防衛に走
 る。終日、激文作意と人命救助にへとへとにつかれ、銃剣
 を片手に夜間の任につく。工兵橋の橋脚に立つ、ふと近づ
 く人影にあどろいてみると、一人の死人とも若人とも知れ
 ない。血みどろの顔も定かたない寒さで、「兵隊さん、そ
 の銃剣で突いて下さい」と、とりまがられた。翌年
 の就野のたつた今もその声は聞えてくる。

橋の上から見下す川面には、数百人、数千人とも定れぬ
 人々の死体浮中つくりと川下に流れてゆく、空は星の明り
 で赤く、「地獄の陣はかくあらん」の旗幟を呈していた。

5人の兄弟とも戦事に参加し、2人の兄を失う自分とし
 て、戦争の機軸は身に浸みまよくわかる。また自由の尊さ
 もきれなりにわかるような気がする。口元だけで、さし半
 和を費し、自由や平等を狂歌するかの如き虚言が、今日地
 間にひろがって横な鉄がするるのは何日であろうか。個々全
 体の中に埋没し、大きな流れの中で戦争にかりたてられる

そんな田に私はしたくないし、次代の子どもたちとそこに
 おきたくない
 眞の平和教を心から念じる者の一人である。人類
 の幸福のために



……お国のために? (母の話)

川本 ひとみ

母が小学校の頃、毎日「は襲らんか、なくなりやええの
にの……」戦争に勝って、はよう終わらやあええのに……
」と怒っていたぞうです。

夜中に「空襲警報発令!」B29が呉地区の上空に向つて
います」という情報に、老い、防空頭巾をかぶり、裏山の横
穴防空壕にとり近所二十数名近くが避難し、不安な一夜
を過ごしたことも度々あったぞうです。昼間の空襲は、家か
ら外へは出ないよう、隣家にとじこもつて、不安におびえて
いたぞうです。

学校でも勉強は第2で、遠征訓練をしたり、勤労奉仕で
出は兵士の家族への農作業の手伝いをしたり、道路はたの
草取りをしたり、畑を耕していもをうえたり、野菜の種を
つけたり、大人も子供も一生懸命だったぞうです。食
卓には、家で作った野菜に、産を石うすでひきわつたのを
入れて、ぞうすい、にしたり、いもをふかして代用食と
していたぞうです。それでも、今頃のようには、不平不満な
ど言えないで、ただ、お国の為と……と、何の偽の戦争で
あったのか、子供心に何を憑えて毎日を過ごしていたのか
記憶がうすれてしまったぞうです。

いろいろな話を聞いて、まだ知らなかったことをたくて、
人知ることができました。今の戦争のない時代に生まれてい
る私たちには理解できないくらい苦しんできた人々をた

くま入ります。私たちは、もう二度と戦争なんてあこして
はいけなりのです。平和を守り続け、みんながまたして暮
らせる世の中にしていかなければいけないと思いました。

……戦争、くりかえすまい。

高次 留美

昭和16年12月8日

「大本営発表、臨時ニースを申し上げます。わが陸海空
軍は、米英に対し本日未明戦意布告しました。」

この放送によって日本国はついに第二次世界大戦へ突入
した。戦争の原因は、各国からの重大資源である石油のス
トップであった。これによりやむをえず参戦したのだ。

戦争に突入しても国民は、「神国である日本が負けるは
すはない。さつと勝つ」と信じて疑わなかった。それは
当時小学をだつた両親にとつても同じことだった。「これ
は大変なことになった。しかも負けるはずはない」という
確信が胸の中にあつた。

しかし、戦争というものはお金のかかるものである。唯
かに日本は最初は強かった。が、しよせんは島國、物資の需
要量には勝てなかった。

国民生活も次第に苦しくなつていった。食糧統制のため
配給でしか食糧は与えられなかった。すべて軍人優先の世
の中、そんな中で飢えた子供達は、いものつるや、くま

で食べていた。新せる工事はすべてイモ類をうえさせられた、学校でも勉強どころではない。農桑作りに専念させられたうえ、いつ空襲があるかも知れない。それでいふも防空頭巾を携帯していなければならなかった。

——昭和20年3月

広にもしついに空襲か!

米軍機は、工場も家もメチャクチャに破壊したうえ、大勢の死傷者を残して去っていった。

それからしひんばんにやっ来ては破壊して帰って行った。子供達は激しい憤りを覚えた。か、しよせんば子供、どうなるものでもなかった。

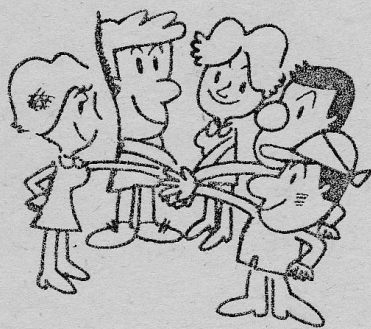
——同年8月6日

この会館へ集っていた母達は、一瞬まぶしい光を感じた。そして次の瞬間「ドドンッ」という大きな音を聞いた。次に目に入ったのは死神の影のような巨大なきのこ雲だった。「あれ、何?」「まあ石洞タンクの爆発ぢやない!」母達が見たものは原子爆弾だったのである。遠い広島のでき事のはずなのに、すぐそこでおこったような一瞬のでき事だった。

当時、これから20年は豊不しはえないだろう、といわれた恐るべき原爆投下された広島。その広島が戦後30余年でこれほどまでに発展した。今現実には広島は完全に蘇生している。これは夢でも幻でもなく現実なのだ、し

かし、これはどこまで発展させるためには、多くの犠牲があった。この事も忘れてはならない。

また、私達はこの日本をもっと住みよくしてゆく義務がある。そして過去のあやまちを二度とくりかえしてはならない。この日本を蘇生させてくれた人々のためにも、又、原爆で苦しんでおられる数多くの人々のためにも。



ぼくは、幼い時から幾度となく戦争の話を聞かされた。母は、広の第1航空隊で、わずか十三歳ぐらいの時、働かされたという。幼い母には戦争について、何もよく知らなかったという。ただ、アメリカの戦艦がよくせめてきたので、そのたびにふるえていたという。こんな戦争の事をよく知らない子供達まで動かせて何のために戦争をしなくては、いけないのだろうか。そのことは以前、甲学校の先生から聞いた記憶がある。

「戦争とは、一種りの資本家、政治家が利を得るためみんなを犠牲にしてまでまきおこした、じつにくだらなものである」といわれた。また、父母は、いつもいもするや、ダイズのカスを食べていたという。今、ぼくが考えると、そんなものがよく食べられたものだと思ふ。しかし、そんな物でも食べなければならなかったのである。そして驚いたことに、母は原爆を見たというのだ。母がけうには、働いていると、ピカッとひかり、ドンと大きな音をたてたので、みんなが机の下にかくれたという。そのあとでモノコ雲が見えたという。原爆の恐ろしさはわかるような気がする。

そして母は、戦争が終った時、家の電燈が光々とつけられるのが、とてもうれしかったという。なんだか、わかるような気がする。ぼくの父は、戦争に負けたとき

くやしかったといった。また、これは先生に聞いた話であるが、ある子供が作文に、「戦争をやつて、戦艦に食つて、アメリカ人をたくさん殺して、それで戦死した」とかいてあったそう。

ぼくは、教育ほど恐ろしいものはないと思う。おしえることによつて、それはそうである、と考えさせる力をもっている。だから、一人一人が正しい認識をしなくてはいけない。

今の日本は平和だといわれるが、ぼくは、この日本の人みんなが、戦争、その他において、正しい認識をしない限り、いつまでたっても、平和は、訪ずれて来ないと思う。



坂口 信義

二歳十一ヶ月で父と死別し、間もなく長兄も出征。五・六歳の時には次兄も戦争に、残された母と祖母と三男の兄とも別れて母の里へ一人で疎開したのは小学校四年になったばかりの時でした。八月六日、疎開先の小学校で朝礼が始まったとたんピカッと目くらむ光線が走り、生徒全員くもの子を散らしたように逃げたものでした。その一時間後、広島から負傷者を乗せた汽車がどんどん駅に入り、かけつけた私たちに一生忘れられない光景を焼きつけたのです。顔・手足・外気にふれている部分は真二つに別けて石は黒く炭のようになり、左半分は普通の膚色といった若い男の人の衣服が全部焼け落ち全身さわるところもない程焼けただれた女性等々、近所のやさしかったお姉さん、一人は家に帰って一週間後に死亡、もう一人のお願さんは現在まで遺体も何もわからないまま……。

私たちの小学校も原爆病院に変わり、勉強は各所のお手へばらばらに別れて通い、ほとんど勉強らしい勉強はしなかったように思う、今から考えると夏休みもなかったようである。

原爆投下から何日か後の事である。家の前を木で作

った小さな車に全身焼けただれた女の人を乗せ、御三人らしい人が真夏の日影のまったくくない田舎道をとぼとぼと通り過ぎて行かれた。一時間、いや二時間くらいたっていたでしようかまだ日も落ちていない暑い中を又とぼとぼとこちらに帰って来られたのです。たよった家に入れてもらえなかったとの事。道路端の私の家に水を飲ませてほしいと立ちよられた。コップに水を入れてあげたけど車の上の女の人は口もあけられない程にはれて焼けただけ傷口にはウジがわき二目とは見られないように水が全々飲めず、私は納屋に走り麦ワラを持って来て口のすきまにさしてあげたのです。おいしそうにコップ一杯の水を飲み深々と顔をさげて立ち去って行かれたあの時の二人の姿、今だに鮮明に出されます。

実際に原爆にあったわけではないけれど今だに思い出すたびに胸のうずきをおぼえます。

長兄を戦争で失ない、家を戦火で焼かれ、其の後遺症で、祖母も亡くし、戦後の食糧難でひもじさに泣き、つくづく戦争のむごさ、哀れさを感じます。

これからの子供達にはこのような思いをさせたくはない、させてはならないと思うのです。

「原爆投下」(父の手記)

住吉 隆義

広島に原爆が投下されて三十二年の暑い夏がやってくる。昭和二十年八月六日、私は学徒動員で、広海軍工廠で手留弾を造っていた。その朝は、一度警戒警報のサイレンで、防空壕に避難して出て来て、作業にとりかかった瞬間、ピカッと目の前が真っ白に光り、少しして、ドカンと言う大きな音と共に、復部にズンと響く衝撃を受けた。皆んな外へ出て、西の方を見ると、入道雲のような大きな雲がどんどん上空へふくれ上ってゆく。あれはなんだろうと、うわさするのみで直実には解らなかつた。翌年の新聞で、広島に新型爆弾投下されることのニュースで被害状況もぼつぼつ解り出した。

そして、近所で広島に通勤、通学していた人の死者や、けが人の様子も、わかつて来た。広島駅において爆風で、吹っ飛ばし、放射能をあびて死んだ人もいる。

私の兄嫁の家は、段原町であった。「家が瞬間ペチヤンコになり、その中から、母と妹と自分は、人に助けられながら、はい出したが、父は、家の下敷きのまま、燃える日の中で死んで行った」と、涙ながらに話して呉れた。先日、三十三回忌の法要があった。兄嫁の家では、兄も原爆病で亡くなっているの、同時に二人の法要であった。原爆は、一瞬にして、一家族、

一家族、すべての人を不幸に落し入れた。二十三年たった今でも、皮膚に受けたケロイドは消えない。こんな悲惨なことが行なわれてよいものだろうか。

もう一度当時を想い起すと、原爆投下の翌年の夏休みに、友人と二人で、汽車で広島に行った。一年たっているのに、広島街は、ペンペン草でおおわれ、宇品の方まで見わたされた。ビルは、福屋が無惨な姿を残しており、人の住んでいる家は、全くない。八丁堀あたりの草むらの中を歩いていると、頭がい骨が、あちこちに、散らばったままであった。一年経った八月の広島である。いかに大くの人が死に、被害が多かつたかがわかる。

「世界平和」と口では言われながらも、日本の政治は戦後の日本人の心からの願いを生かされたものになつていないだろうか。一人一人が平和への強い願いと実行力をかかげて、戦争への道は二度と歩まない誓いを、あらためてしようではないか。

忘れもしない三月十九日の呉空襲（父の手記）

村田 哲士

ただ一発の原爆で、かい滅的打撃を受け、何十方の尊い生命を奪はれた広島市に比べようがないが、東洋一といわれた呉軍港と呉市は、何十回と空襲を繰り返され、特に終戦になる8月15日の前日までは、警戒警報のサイレンが殆んど毎日のように鳴りひびきわたっていた。しかも、一日に何度の日も……その度に私達呉市民は防空ごうにかけ込み、ビクビクしていた。当時旧制中学生だった私を含め、若い青少年達は、滅死奉公、忠君愛国等、軍、政府、学校教育等のオカゲで戦争の批判等、又自由を唱える事は到底できないようなものではありません。米英空襲は自分達の手でと本気で思っていた純心な若い年頃であった。戦争が終って考えると全くナンセンスで悲劇なことだ。それだけに今は平和を愛すると去う心は増々強まって行くばかり。戦時中呉市に住んでいた私は色々な体験をしたがその一つ、忘れもしない昭和20年3月19日早朝の頃か。軍人を除く我々呉市民にとっては始めての体験、米軍カンサイ攻撃機二百数十機の空襲はしれつを極めた。その日今の西中一丁目、^{呉市}交通局の向い側で元、海仁会呉家族共助所に偶然泊まっていた。朝起きて顔を洗い、塩味付したパンを一口カジツタ時だった。

突然、ダダダダダ、ドーンドーン高射砲や、防空機、機関銃が鳴り出した。急いで外へかけ出してみると、空には米機グラマンF6Fが何十機か空を舞っていた。これは大変だとすぐ庭の防空壕に逃げこんだ。そこには三人程すでに職場の人が入っていた。ドーン、ドーンその度に暗い防空壕の中はゆれ、外を見たかったが制止され出られない。何分たったか記憶がない。外が静かになったので外へ出た。良く晴れた空に朝日がうすぼんやり照っていた。カジリかけていたパンを食べて事務所へ行くと、三、四人いたようだったが覚えていない。続いて第二波攻撃が始まった。私は二階に上り屋根上の監視ヤグラにかけ登った。生れて始めて戦争というものを目のあたりで見た珍らしさと好奇心もあって恐さは知らなかった。うす黒い色のズングリしたグラマンF6F、色は忘れたが翼と胴に星のマークがクッキリ、今まで何度も見た日本機の赤い丸のマークとは又違って見えた。まさしく敵機……二河川の上流あたりから、二機つつ、編隊組んで幾重にも……その度に操従士の顔がハッキリ見えた。軍港に近づくと殆んど垂直に舞い降りる。その時、二、三個の爆弾が、鳥のフンのように落とされるのが見えた。カチーンカチーン、サク裂した数種位の高射砲弾の破片が屋根反に落ちてあちこちでハジケル。危ないとの声に気がつきあわてて降りた。

今度は鉄カブトをかぶり、塵ぶとん2、3枚を頭にくりつけて又屋根に登った。米稼徒士の顔が無気味に見える。グラマンが機首を下げようとした時、胴体あたりからボンと赤黒い火を吹く、命中だ。

私は数機火を吹くのを見た。米機が機首を下げようとする前後である。日本機が見えないのはさびしく感じた。晴れ上っていた空は一ぱいの弾幕で、朧も暗くなっていた。太陽も見えない、灰ヶ峰頂上の大砲が時々ま立っては打っていた。マドロカシイ、吳海兵団屋上の機関銃が数基盛んに火を吹いている。必死なのだろう。バユーン、バユーン軍艦の大砲が大きな音で打ち上げている。パーンとハッケルような大きな音があった。元 憲兵隊（現在吳警察署）の壁に高射砲弾が、米機の砲弾がさく裂したのだろう。ダッダッダッ、いきなり米機の機関銃がなる。ヒョ、道路を見ると中年の女性が逃けている。足元に弾が地煙りを立てて追っていた。この時私は始めて恐しくなって屋根から降りた。それから間もなく第三攻撃が始った。もう何も覚えていない。午前11時頃まで続いたと思う。

吳港の軍艦は大丈夫だろうか？

二 三日前に見た戦艦大和は無事だったろうか？

ふと、映画で見た真珠湾攻撃を思い出したからだ。

防空壕から顔を出して空を見ていた人が破片弾で首を切られて死んだとの話が入った。私もバカだったな、

始めてゾーとした。

戦争というものは全くバカげたものだ。敵も味方も生命を奪われ、財産を失なう。ケガをして一生なげき悲しんでいる人が無数にいる。もう戦争等を思い出したくない。

全世界の人々が本当に平和を愛することの大切を身を持って知らなければならぬと思う。

忘れられないラジオの叫び声

住吉 其子

私が、小学校6年生の時、戦争はますます激しくなり、授業中も机の下にかくれる練習をしたり、校庭で遊んでいて空襲になったと仮定して、かげに伏す練習をすることが多くなった。現在の学校給食は、栄養も考えられ、あの頃の給食と比べれば、ずい分とちがう。どんぶり一杯の雑炊が配られ、それを美味しいとすすり満腹感を感じたものである。小学校も卒業間じか吳は機銃掃射に合い、屋根には無数の小さな穴が開けられ、そこから煙がくすぶって出ているので、両親は必死で、叩き消していた。裏の溝には、万年筆型爆弾が投下されていて、母と一緒にスコップで、そうと取って警察へ恐る恐る運伏込んだ。

この頃まではまだ序の口であった。

やがて女学校に入り、鍋から呉迄の道程を(4km余り)往復する毎日の中で、何度か途中で空襲に合い、ここで死ぬのかとビクビクしたことも度々である。防空壕に入っただけ、中の天井から土砂が落ちて来た時は、もう駄目か……と思った。後になって、防空壕から出てみると防空壕の上に一む爆弾が落ちて、大きくえぐられていて、ゾーとしたものである。警戒警報が解除になると母はすぐに七輪に火を起し、ダンゴ汁采の代りに大豆の配給があったのでそれを粉にして、メリケン粉と混合して作る)を作ったり、大豆御飯を炊いたり、少しの暇の間でも、それだけはやっていた。このように空襲は日一日と激しくなっていた。「今に神風が起って日本は勝つ」と云う大人の言葉に安心しながらも、不安を感じていたものである。

或る日、突然に「ダン」という音であわて隣家の芋がマに入る。前ぶれもなくこのように突如として空襲に出合うことはしばしばとなった。上のおばさんは一旦、防空壕へ逃げたのに、又我が家へ物を取りに帰った所を直撃を受けて亡くなった。

8月6日、運命の日、居間にいた私は、ものすごい震動の為、台所へ行ったり、表へ行ったり、逃げ場所を探した。海軍工廠のガスタンクが爆発したのか、江

田島の火薬庫が爆発したのかも……と色々噂はとんだ。夕方頃には何でも広島へ新型爆弾が落ちたんだって……ということになった。

この日の原爆投下の直後のことであつた。私が居間を右往左往していた時、ラジオから聞えて来た悲愴な叫び声、

「こちらは広島放送局でございます。大阪放送局に申し上げます……」

この声は32年経った今日迄、私の耳から消えない。

「今も身震いする空襲体験」(父の手記)

柳沢 平兵

終戦の際まだ16才で、一学生に過ぎなかった私には、従軍の体験がないので、空襲に会った時の体験を記述します。

私が学生生活をおくっていた長野市は、終戦間際の昭和20年8月13日に、米軍艦載機(延、約100機)の執拗な波状攻撃をかけられ、軍施設、飛行場、機関区など、伏にこれらの施設の隣接区域の民家等に大きな被害がありました。

私も危く九死に一生を得た一人で、その日の恐ろしさは、32年経った今でもまざまざと脳裏にやきついています。

ます。敵機の来襲は、朝から晩まで六回に及びました。たまたま私達の寄宿舎は、飛行場の直ぐ近くにあり群をなして来襲した敵機は、まるで私たちに向って体当たりするかのように急降下しながら機銃掃射を加えてくるのです。その後直ぐに、飛行場の上で旋回しながら上昇し、又一群になって襲ってくるのです。それを何回も何回もくりかえしてやるのです。

敵機来襲の知らせよりも、敵機の来襲の方が早いのですから、とに角死にものぐるいで逃げ出すしかありません。防空壕はあっても収容人員に限りがあるので防空壕に入りきれなかった者は、まず身近の畑の中に身を伏せて何とか敵機の通り過ぎるのを待ち、次に来襲するまでのわずかの合間をぬって300m程離れた摩川の河原まで逃げのびる訳ですが、その途中畑の中に身を伏せている時、機銃掃射された弾丸が、ミシンの縫目のように、ほぼ6m間隔でピューン、ピューンと畑の作物を打ちぬき、地面に突きささり、砂煙をあげるさまは、体験したものではないと判らない恐ろしさです。特に今度こそ、自分の伏せているあたりに弾丸がきそうだということ、瞬間的にわかった時の恐ろしさは無事に身体をよけた所に突きささったことが判った時の喜びとは、たとえようのない一瞬のドラマで、いつ思い出してもぞっとする思いがします。

〃恐ろしかった吳の空襲〃(母の手記) 占本 征手
私の家は、今のIHI吳造船所の近くでした。当時私は六支、十支を頭に四人兄弟だったので私は祖母の家で預けられていました。家とは、近くでしたが防空壕も遠い。空襲警報のたびに、私は祖母に手を引かれすぐ裏の防空壕に逃げ込んでいました。丁度、吳の空襲の時だったと思います。B29が空から不気味な音と共に爆弾をあちこちに落しました。その時の事は、今でもはつきり思い出されます。

空襲警報が鳴るかならないかの事だったと思います。その辺一帯が火の海になり、祖母は私の手を引いて防空壕に急ぎました。気がついてみると祖父がいません、祖母はあわてて私を連れてたまま、家に引き返ししました。祖父は火ばちの前できせるをポン／＼たいて動く様子はありません。それでも祖母と私は一生懸命防空壕へ連れてはいました。今思うと余りの恐ろしさに気が変になっていたのでしよう。防空壕の中は、熱気と煙りでむせ返るような熱さです。それに赤土とどろの臭いで息もつまりそうでした。

入口は赤い炎がめらめらとまるで防空壕までなめつくすように人々は中へ中へと流れ込みました。そして布にどろ水をひたし、それで口をおおいました。暗闇の中で不安と恐怖の一夜を過しました。一夜明けて防空

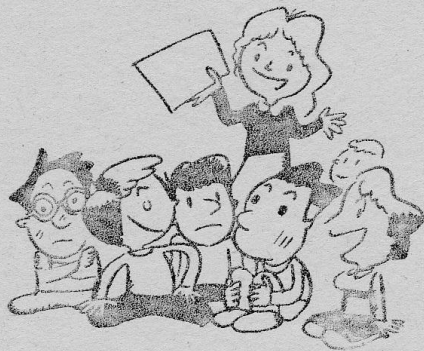
場を出た私達は、ただ立ちすくたばかりでした。

すすり泣く声、親や兄弟の名前を叫ぶ声、自分の家の
様ひつぎをこぐる人、息こげになつた米のいやな臭へ、そ
の時の事は、今でも生々しく思い出されます。

祖母は、私をおびつてすぐ近くの私の家へ逃げまじ
た。幸にも家も家族も無事でした。

けれどもその時、いつもやさしくしてくださつた魚
屋のおじさんが逃げ遅れ、自衛隊にのつたままたぬれ
て焼死されたそうです。

こんな残酷な戦争は二度とくり返してはいけないと
共に子どもと話し合つて行きたいと思ひます。



・戦争はすべての国民を不幸にする。 岡光 博

父の小さい頃は、中一二年の終わりから、工場で働かされ、学校は、月に二、三度行く程度だったそうである。工場の昼食前に、空襲警報があり、近くの防空壕へ鉄三枚、橋5枚くらいで奥の方は何方にも分かれて（に逃げこんだそう）。そして敵機が飛んできて、爆弾（空中で爆発し、ゴムのようなものがたぐさんちり、それが付着して燃やす）が落ちた。そしてその爆風は、暗い風でグワッ、グワッと断続的に吹いたそうである。

食べるものといえは、工場から出る昼食はダイズの中に米が混じっているもので、そのダイズは消化が悪く、よくかまないと次の日には必ず下痢をしてしまうようなものだったそう。毒に焼つてからもイモやゾウスイなどで腹をふくりますだけのものだったそう。

戦争が終わってからも、学校の校舎が足りなくて、いろんなどころの建物を借りて、勉強したり、二級校へ海軍が贈っていた薬品を取りに行ったり歩いて学校まで持ってきたり、江田島の方まで机と椅子を取りに行き、川原右から、学校までまた歩いてもって帰ったそう。校舎も、生徒が、土を入れて作ったそうである。

このように勉強した記憶はないそう。

このように戦争は、実際に戦場で戦っている人ばかりでなく、身勢の人々に、若しみを与えていると思ふ。だから、戦争など二度と起さなければいい。



「父母が語る戦争体験」

A 江野 馨
B 加藤 久男

(一) あの戦争が始まったとき、父母はその時点でどんな気持ちだったのだろうか。語ってください。

A 日中戦争にひきつづき、第二次世界大戦、新聞、ラジオは連戦連勝を報じ、神風や、教科書にも国の為に一命をささげる等々、日本は必ず勝つと信じさせられた。一方青年学校へ強制的に通わされ、手旗信号、軍人勅諭をおぼえさせられ、人殺しの銃剣術をならい、軍人となるべきひと通りの教育をさせられた。一方、学生であろうと若い人は進んで少年兵、少年航空兵等々志願して、友達や仲間が軍隊に入った人も多く、戦場で多くの人が死んでいった。戦死遺族の家として、光栄であるようにしむけ、天皇にいつでも一命をささげる世論を作り上げ、上官の命令は天皇の命令であるとして、絶対復讐の教育と日常生活の中でも、権力の乱用が多かった。今では考えられないような、男女が一緒に歩いただけでも、非国民とよばれ、女々しいとされ、遊ぶことも許されず、人の前では話し合うことさえできなかった。暗い青春時代であった。当時15才、就職してない人は徴用工として軍需工場へ、学生も学徒動員として

勉強もろくろくできなかった。現在の若い人は幸せである事を理解してほしい。

B 目に余るアメリカの政治的行動に対し、堪忍袋の緒を切つて戦争に突入し、総力を揚げて、勝利の日を信じ、その日その日の不自由を堪えて、戦争目的を達成する為に、老若男女を問はず、戦果の大きい事が報じられる毎に、狂気の歓声をあげたもので、東洋の小さい国が物量にも国力にも雲泥の差がある米英を相手に取り、聖戦に入った。正義の心が強く序々に何かわからぬまま、好むと好まぬとに拘らず、戦線が拡大して行った。神国日本の一駒となり、戦争目的完遂の為、務める考えです。

(二) 戦争中の生活はどんな風だったのだろうか。当時の経済の仕組みなどにふれながら、語ってください。

A 戦争に勝つまでは、ぜいたくは敵だ、とお米は配給、衣料品も切符制、大豆の粉はまだいい方、トウモロコシ、小麦を粉にしたカス(モミジ)とむねい鶏のえさになるようなものが主食で、イモの粉等はあま味があつてよかった。たばこや酒も配給制、お菓子なんて見たこともない。今の時点で思い出すと夢のようであり、若い人には信じられない生活であ

った。食べるものはなく、着るものはなし。仕事は一人前以上に、戦況が悪化するにつれ、防空壕を掘ったり、小学生は親をはなれて遠くに学童疎開をさせられ、あなた方の父や母はそんな体験をさせられた人は多いと思う。再び戦争をしてもならないし、させてはならない。

私は昭和20年6月1日と思うが、大阪で船に乗った。だが、空襲に会い、B29の焼夷弾が向のごとく落ちる中を船で逃げたが、もう駄目だと何回思ったか。あの恐しさは忘れられない。大阪港から外へ出て、じゆうたん爆撃で、あの大都市大阪が火の海で、世界最大の大火事を見たことになる。夕方焼け野原になった港に帰り(天保山)の友達の家族が不明になったというので、あちこちに黒いけの死体をさがし廻ったり。防火用水池の水死体を探し廻った。後日、死体整理に広場に山の如く死体を積みあげ、火葬にしたが、毎日、の如く川上から焼死体が流れ、水道の水は出ないので、安治川の川口で、死体が流れよこれた川の水をわかし、一週間のんだことも忘れられない。テレビや映画で戦争物をよくやるが、決してかっこいいものではない。地獄であり、決して戦争をしてはならないし、平和な世に生まれた人は、この事実を知ってほしい。

B 統制経済と言ひ、砂糖、お米等の生活必需品は切符で配給を受けました。すべては戦争の為の日常生
活であり、不自由で、質素な生活の中に、精神的に
練成された学校教育を受け、「教練」と言つて、
中学校(現高校)以上に実行されました。軍需品を
十分に作る為、民間には、物資不足を来し、「忍
ぶ」事を教えられた時代でした。その中に、ひたすら
青少年には、身体を錬成すると共に、精神的には
「国家」に対する忠誠を誓つたものです。
物資不足に対し、世情では「ヤミ」取引のあつた事
もある様です。金のある人は何時代でも良い事をし
ます。現代にも言える事ですか？

(三) 戦争中、どんな気持ちで生きておられたのたろうか、
当時の政治の仕組みなどにふれながら語つてくだ
さい。

B 敗戦の色が濃くなつても、日本は我が方の損害軽
微なりと報じ、今に神風が、鬼島米英を吹きとばす
と、奇跡を祈つたものだが、本土空襲で、神戸が夜
空襲に会つたのも、焼け野原になつた大阪で見たし
大編隊で200、300機が、毎日毎日本土をおそつてくる
残されていた一部の大坂(桜島)は爆弾攻撃で、造
船所をねらつて来た時も、安治川の対岸なので、爆

の犠牲がとびざり、機銃掃射をまかれ、この時にもまた氣はしなかつた。その二日後、古郷に帰る列車の中で、岡山駅に停車したとたんに、空襲に会い、岡山もやけ野原となり、命からがら逃げた。はの産婦まで歩いたが途中、けがをした人や、やけどをした女の人達が「水をくれ、たすけてくれ」と、練路にころころ助けを求めていた中を歩いた事も忘れられない。自分を守ることも産婦一人であつた夜中の三時の考案がある。なせ命がけて生活しなければならぬのか、なせ日本がやられていゝのか、家はやけてラジオはなく、新聞もしらろんない、知る事々々出まなかつた。軍人が政治の主権をにぎり、破滅の巻に迫つて来た。いまわしいあの戦争に、私の青春は敗戦後の苦しい生活と共に終つた。日本中の人の人生は大々く変わったとむかえる。

B 「聖戦」を信じ、為政者の声は絶対と思ひ、命ぜられるままに、主従の關係を保つた秩序ある毎日でした。軍隊に入り、上司に指導、教育された日々を送り、苦しい中にも楽しみを見出して、僅かな心の豊かした青春とさうには悲しい位の時代でした。

「軍人は政治に關与せず」は基本的なもので、何も知ることもなく、知る必要も感ぜませんでした。

知らされる事もなく、目前に与えられた「命に」絶對的に服従し、目的を達成しては、僅かに自己満足してみた様です。



私の幼年時代

藤岡 淳

昭和六年 第二次世界大戦が勃発した年、「生のよ」
「場やせよ」といわれた時代に生れて来た。しかし
景気がよくなったわけではなく、内地(日本本土)では
生活が苦しく、昭和七年末、外地(台湾)へ移りました。
た。その際、私の両親は兄弟から外地へ行くことを強
く反対されたそうです。生きて帰れないからと。(戦
争に敗れる意味も含めて)

熱帯の地、台湾は、作物は豊富で、食べ物のには
自由なく、代用食にはバナナでした。しかし、戦況は
悪く、フィリピンからの空襲は毎日、サイレンが
鳴るたびに、防空壕にとびこんでいました。日本の飛
行機が墜落していく様子、夜空をこぼす照明弾、病院
の前に、全身を痛で並べられた人達、公衆の防空壕で
の爆撃投下による惨状、電信柱は倒れ、落下さんがひ
っかかっている様子、その面影しみに引っぱって爆発
して死んでいく台湾人、逃げ遅れ、防空壕にとび込む
と同時に射撃される者くなっている父親、終戦まじか
ら生きて、日本に帰れないと、家族全員自害した、多く
の近所の人達など、いやな思い出が天山にあります

「養育院」にて

橋次 善三郎

「養育院」といって、私たち小学校5年生、約50
名が、両親の奥の田舎に疎開したのが八月、奥の保護
者から食糧が送られていたのが、突如空襲、全滅から
は、私達の食糧は送られなくなり、急に、食糧庫にお
そわれた。

7月、8月、そして、9月14日の晴昼につくまで
飢餓は私たちのけで毎日、食物を深しに仰ぎました。巨
姓さん達の畑仕事を手伝ってニヤリめしをいただいた
時の嬉しき、カエルを焼いて食べる時の気味悪さなど
今でも思い出せる。

この間、一つの出発事が、空腹な私たち子供の囁の
中に残っています。それは、神徳玉砕の時、クラスメ
イトの一人、大田君のお父さん(神徳玉砕の時の指揮
者)がなくなられるのを大田君と一緒にラジオを聞
いていた時でした。空腹を忘れ、静かにラジオのまわ
りに坐っていた私たちは、大田君の眼に涙を更、淋し
い気持ちにおそわれ、自分のことのように思われたの
は私だけではないでしょう。

ほんに、戦争は、子供の心まで痛めることよ。

カ、忘れてはならぬ「中学時代」

谷岡 勲

わたしの青春時代は戦争一色でまったく夢のない灰色の時代であった。・志願要員・・減私奉公・

・割れて後止心・一切の自由は認められず・爆文審判・食糧配給・学使勤労勸励・学使失出陣等・強力な戦時体制がしかけていた。当時の旧制中学には、陸軍師団司令部から、直属の士官が配属され、生徒に激発した軍事教練を指導していた。教練という授業が通常の時間あり、配属将校の権限はたいしたものので校長につぐ力を持つていたらしい。私たちの中学校へはY中尉が配属されてきた。色浅黒く、筋肉質で眼をすむとく、見るからに精悍な士官であった。

中学三年のある期間のこと、全英整列して教官を持つべきところ無器用な私は銃の構持（銃弾をつめる所）がはまらず大変慌てた。慌てれば様でる程はまらなくなつて必死でなおそうとあせつた。そのため集合に遅れ、あいにくY教官の目にとまつてしまった。

烈火の如く怒つた教官は、級友の前に進み出した私の頬に、20発の往復ピントクを喰はせた。

両足をふんばり、息をぐいしばつてやつとその往打ちに堪えた。私の頬には、はつきりと手印が残つていた。その時、私の心のうちは不意謀と、権いという教員よ

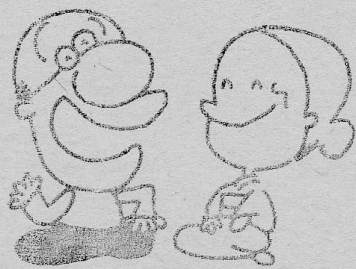
りも、ただ歌しい思いで一杯であった。あとで級友の一人が「あゝまでしなくてよいものを」と小声でいった言葉が今でも耳に残っている。

今から思えばあの当時、最しい軍務を帯びた配属将校の使命感から生れた行為と思われ、かえつてその哀れが感じられる。

その後の戦争は我れに利あらず敵艦を迎えた。出征しなかつた私は幸い生きのびたけれども、級友の中には、海軍航空隊予科練習生として、遂行機もろともに敵艦に自爆して焼死した人、Y中尉も犠牲されたらしい。私の叔父も戦死した。Y中尉も犠牲されたらしい。

戦争は容赦なく人命を奪つてゆく。善悪を奪つてゆく無常可憐なものである。

平和ほどありがたいものはない。



「教を子を再び戦場に送るな」

森川 正一

物心がついた時にはすでに日中戦争が始つていた。昭和20年終戦の時は国民学校(小学校)4年生であった。終戦時東京に近い海軍飛行場のある茨城県土浦市に住んでいた。しばしば米機の来襲を受け、その度に授業は中断し、夜間であればとび起きて防空壕に避難した。20年3月の東京大空襲の夜は、一夜中東京方面の空が無気味に赤く焼えて見えた。終戦の日まで、家族に一人の死傷者もなく、家も焼かれなかったのは幸運というほかはない。

私の家の隣に軍人の一家があった。海軍兵学校出身の若い将校は、少年たちのおこがれの的であつたように思う。私もおこがれていた一人である。奥さんは美しく、幼い女の子と男の赤ん坊がいた。女の子は私の弟と同年令であつたので私の家によく遊びに来ていた。可愛い子であつた。敗戦の日(8月15日)から四、五日後のことであつた。後から考えればまことに不自然であつたが、この女の子が私の家に遊びに来た。真夏と云うのに晴れ着を着て、「今日、ごちそうをたべたの」と話していた。

その夜、この一家四人は、先祖の墓前で一家心中を遂げた。軍人は、妻と二人の子の頭をピストルで撃ち

抜き、自らも頭を撃つた。さすがに手元がふるえたのか、急所をはずし、彼が死亡したのは、数時間後、病院に収容されてからであつたという。

どのような遺書が残されたか私は知らない。敗戦の責任を感じたのかも知れない。国家や家族の前途に絶望したのかも知れない。彼が予科練の教官であり、多くの若者を飛行機乗り以上に仕上げて戦場に送り出した。戦争に負けて、自分は生き残り、自分が戦場に送つた若者は多く死んだ。このようなことでもあつたらう。戦犯の大物が政界に復帰してはばをきかせているその後のことを思うと怒りがとまらない。

私はこの軍人の年令をすでにこえた。私の子どもが私自身の敗戦の日の年令に近づいている。

「この道一筋」とか「猛烈社員」「特訓また特訓」「俺について来い」など価値観を一つにしぼつて、これに挫折したら自殺しかねないような生き方に同調しかねる私の性格はこのような敗戦体験と無関係ではなさそうだ。ただ、敗戦の貴重な代償である民主主義と憲法、それと先輩教師の重い体験から出て来た「教を子を再び戦場へ送るな」という願いは守らなければならぬと思つている。このことについては、この道一筋で行きたい。

「私と八月六日」

萱原 威

(広島市郊外で被爆 九日廢墟の我が家へ

当時 六五)

一、神戸から広島へ

昭和二十年八月六日。この日は私にとって忘れることのできない運命の日であった。戦争の真っ最中、昭和十九年七月、私たち親子五人(母・姉二人・弟と私は父のフリーピンピン出征にともなつて、それまで住んでいた神戸が連日の空襲で危険になったので、軍人の伯父を頼り、母の里、広島白島という町へ爆心地より一ニキロ)に移ってきた。

上の姉は、広島県安佐郡可部町の奥にある鈴張村のお手に学校から集団疎開に行かされていた。毎日のように、「お母ちゃんのところへ帰りたい」といつて手紙をよこした。食糧のないときなのに、姉はよく肥えていたものだから、同級生から「ブタ、ブタ」といわれて悲しかったのだろう。ニギちがいの姉は国民学校二年生だったので、午前中だけは学校に行っていたようだ。時おり給食でジャガイモの丸ゆでや、ヨモギの団子などを持ち帰っていたが、ある日の食用がエルヤビヨコの丸だきは気味が悪かった。それでも姉弟でわけたべた。

当時は、アワだのヒエだの、まるで小鳥が豚の餌の

ような穀物の配給がなくなり、空腹でひもじい毎日であった。しかし「炊しがりません勝つまでは」と日本の子供達はみんなそう教えられていた。だから誰れも文句はいわなかった。

戦争は日に日に激しくなつて、疎開先からも母あてに面会の通知がくるようになった。それまでは、親子に逢いに行くことは禁じられていたし、面会など考えられないことであつた。それほど戦局は悪化していた。引率はほとんど女の先生のようにあつた。先生としても他人の子供を一刻も早く、親もとに引き取つてもらいたかつたにちがいない。

母は姉のところへ「一日も早く行つてやりたい」と思いながら、なかなか行けずにいた。たとえ行つても日帰りする規則になつていた。

とにかく、母は八月五日には行くことに決めた。それはその日が日曜日だからである。ところが、弟が熱を出したためにその日は見合わせて、「明日は何としても行つてやらねば」と決めていたようである。

母は、子供づれでは足手まといになるので、近所にいる伯母に「子どもたちを預つてほしい」といつてひどく叱られた。「こんな時代に、ひとときでも子供を手離してどうするんね」とあっさり断わられた。母は「それなら、下の子だけはつれて行きますので、上の二人をお願いします。」と二ん願したが、伯母は

「私にはとても責任がもてんから」とにかくみんなつれて行きたい」と突きはなしたという。母は一瞬思案にくれてしまった。このようないきさつがあつて次の日、一家そろつて出かけざるをえなくなった。

二 八月六日 その日

六日 その日はまったく快晴であつた。朝はやく姉が「たけしー おきんさい。アズキご飯よ。」と叫んで起こしてきた。「まさか？」とは思つたが、とび起きてガ、とび起きてガツカリした。コーリヤン（アズキに似た穀物、今では小鳥の餌）が一ぱい入つた麦めしだつた。それでも弟と私は、まるでピクニックにでも出かけるかのようにしゃやいでいた。

朝、七時ごろ、でかける用意はすつかりできた。やっと「警戒警報」が解除になつたのをさいわい、私たちは白鳥の家を後にして、鈴張へと向つた。忘れものをしたのにとりに帰れないのが心残りだつた。

長寿園を通り、三條橋の鉄橋を渡り、横川まで歩いた。そこからやつと軍用トラックの荷台に乗せてもらうことができた。

二の日はめづらしく飛行機の爆音はきこえてこなかったが、母は弟を背に、姉と私を両脇にしつかりと抱きかかえ、今どういうならば、アメリカの北爆で逃げまどうベトナムの母や子の姿とそっくりであつたらう。

母も姉もモンペ姿、私の半ズボンにはお尻に大きなツギが当たっていた。防空頭巾をかぶっているのが暑くてやりきれない。

目的地の鈴張へあと二、三キロのところまで私たちはトラックを下ろされた。砂じんの舞うのどかな田舎道、ずいぶん低いところを谷川が流れ、行く手の家々には、ペンキでまっかに塗られた防火用水のドラムカンが軒下におかれていた。付近のお寺から子供達の声がかきこえてくる。目ざす姉のところはもうすぐらしい。子供の気持をよそに母の表情はなぜかまったくこわばっているようだった。

鈴張も間近にきたときのことだ、いきなり空がピカと青く光つた。瞬間、母は「伏せ！」と叫んで、私たちをそばの防火用水のかけに押し倒した。私は反射的に頭をかかえて身をちぢめた。母はその上におおいかぶさつた。そして、次の瞬間、「ドカーン」という耳をつんざくような音がした。私はもうだめだと思つた。しかし、何も落ちてはこなかった。しばらくはそのままだとしていたが、あたりは静かだった。恐ろ恐ろ顔をあげると、今来たばかりの広島の高高く、褐色とも黄色ともつかぬ大きなキノコ雲が山の上にわきあがっていた。それは八月六日、午前八時十五分、その時であつた。

それから、九一日は広島方面のニューズはまったく

伝わらなかったし、ラジオも放送されなかった。大人たちは口々に広島に何かあったらしいとウワサしあっていた。としかく母子五人は久しぶりの再会を喜びあっていたが不安であった。その日は広島に帰ることを見合わせるようになった。翌日、広島から帰った人の話によると、広島に特殊爆弾が落ちて町は全滅したという。

三、廃墟のわが家へ

せつかく、面会に来て姉をつれて帰ることになって、いたのに姉一人を残して、母子四人は八月八日、広島に帰ってみることにした。入市手続がうまくとれず、可部の見知らぬ人の家で一夜を明かした。その人は町長をしており親切にしてくれたが、おかみさんの気嫌はわるかった。

三篠から橋川に近づくにつれて、やっとたどりついた広島は至るところ瓦礫の山であり、来るときは似ても似つかぬ姿であった。見渡すかぎりの焼け野原、廃墟と化した町並みは、まるで戦場そのものだった。目に映る建物は広島駅と福屋デパートくらい。広い道路だった道端に、無惨に焼けこげた人、人、人、まっ黒焦げの裸の死体がゴロゴロころがっている。『二わい』というより驚ろいた。兵隊がトビ口で死体を引きずってきてもさらんと並べている。道のところどころに丸

太のヤグラを組み、大八車から下ろした沢山の死体をその上に乗せている。「お母ちゃん、あれなにするんね」と聞くと、「死んだ人を焼くんよ」と答えてくれた。重油か何かをかけて燃やしている臭気は何となくさかつかつた。これが人間の焼けるにおいだっただけ。半分くずれ落ちた三篠橋から大田川をみると、兩岸はまるで筏でむつないだように死体が折り重なって浮いていた。

橋を渡り切ったところに罹災者のための救済所があり、私たちは、頭ぐらいの大きなにぎりめしを一つずつもらった。(註、そのにぎりめし。にぎってくれた人の息子が今私のクラスにいる。何という縁であろうか)そばに検門所があり、用のない人はそこから先には入れないという。私たちは、およそ道とはいえない焼け跡を通ってわが家へ急いだ。

わが家のあたりに、たどりつくのにまったく手間どつた。目じるしは玄関横に植えてあった直径五丁センチほどの柳の大本であったが、すっかり燃えつき、地上メートルぐらいいしか残っていない。木の先は黒い炭になつてとがっていた。カワラをはぐとまだ火の気がある。所どころに煙すらのぼっている。裏の畠にあった井戸のふたは燃えてなくなり、その中には何人もの人らしい姿がある。ヤケドの熱きに耐えかねて、中にと伏込んだものらしい。

真夏の太陽は谷敷なく照り、時刻は正午をかなり過ぎ、

ていたらしい。「ここがあんたらの家よ」と母は一言
いった。母子は消滅したわが家の前で茫然と時をすごし
た。「これ、たけしの本筒よ」といつて姉が見つけてき
たがそれは焼け焦げて、ペチャンコになっている。炊事場
は足の踏み場もない。母はしばらくその場にしゃがみ込
んでいたようだ。私たちはあれこれ自分のものをさが
すのに必至であった。その時母は何も考えられなかった
という。

四 泣きたいような少年時代

こうなつては、曰が暮れぬ間に上の姉が待っている鈴
張村の寺に帰つてゆくしか行くあてがなかった。しばらく
は鈴張ですごすことになった。母は臨時のまかない婦
になつて疎開中の子供の世話をした。シラミだらけの女
の子の首すじにノミがぞろぞろはいまわっている。広い
お寺の本堂での痛起きであったが、部屋中ノミがピョン
ピョンとんでいた。鈴張での生活は楽しかったが、ひり
ひり毎日の連続であった。そんな苦しい生活が一年も続
いた。だろうか。秋にケガした親指のツメは長い間なおら
なかった。

このようないきさつで、私たち母子五人は原爆から生
命の危険だけはまぬがれたが、それ以外のものは何もか
もなくしてしまった。母子四人は、姉一人を残して九分
九重、白島で死すべき運命にあった。危険を感じた神戸
から、安全と思われた広島へわざわざ来たことも皮肉な

ら、広島から鈴張に行くのによりによつて八月六日さえ
らんだことは運命のいたずらにしてはできすぎている。
「戦地でお父さんが、きつと守つてくれたんよ」と母は
いう。それにしても、もう一時間白島の家を出遅れてい
たら、もう一日面会を延ばしていたら、いや八月五日に
予定通り姉をつれて帰っていたら、今はいったいど
うなのだろうか。考えただけで身の毛がよだつ。母子が
一縷に焼け死んだのならまだしも、母がでかけたその後
で、子供だけがとり残され、やけどで全身あかむけにな
りながら、燃えさがる炎の中を母を求めて「おかあちゃ
ん、おかあちゃん」と泣き叫びながら走りまわっている
その姿を、私は毎晩、夢に見るうなされた。

八月六日の原爆の曰を境に、私の少年時代はたとえよ
うもなくみじめだった。食べ物はない、夜こっそり納屋
にしのびこんでウメ、ホシヤ、ラッキョをかじった。隣の畑
に野菜を盗みにも行った。イナゴを捕つてオヤツにし、
コエをかっいでイモも植えた。頭はフケとシラクモだら
け。時にはノドから回虫もはきだした。虫下しのマクニ
ン草が空腹をみたしてくれたのは皮肉であった。こんな
に泣き泣き生きねばならなかったことを、私は忘れな
れはならないのだろうか。「子供に何の罪があるのか」
だ。「なぜ私たちの町が戦場になるのか」
「こんなものが正義の戦争なものか」
と子供心に思った。

五、戦場で狂い死にした父

実のところ、父は私たちの知らない間に、同年六月二十九日、フィリップスのマニラで戦死していた。マニラに帰るまで、彼も興奮しかけたのを、戦場に抱きとめられ、果ては狂い死にしたというところ、翌三十一年の秋におなじ隊の人から知らされた。

偶然の積み重ねにしろ、父の幻のおかげにしろ、私たち母子五人は刀傷一つしないで生き残り、戻ってしまつた。原爆襲撃にならなかつたことは感謝している。しかし、この日のことを私は素直に喜ぶことはできない。原爆で家財を失つたことはあきらめよう。しかし、このように恐るべき体験をさせられたことを手放して喜ぶわけにはいかない。「命が助かっただけでもしめあげやね」と他人はいう。「運がよかつたんぢやね」と感心もしてくれる。しかし、だからといって、私の戦争や原爆への怒りは消えはしない。たぶん私たちのような生き方をした母と子はいないが、むしろない。だが、このような体験はしなければならぬ。それはすべからぬ。

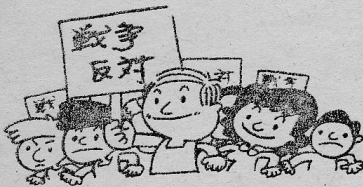
「戦争を起した奴が憎い!」「原爆をおとした奴も憎い!」それに、父を戦場で狂い死にさせた奴はさらに憎い!、妻子からひき離されるように戦場にかりたてられ、マニラで狂い死にしたという亡き父の苦衷を思い、ヒロシマ、ナガサキで焼死し、傷つき、死にたえていった無数の死者たちのことを思い、また戦後三十一年をま

きのびてきた自分の骨身に刺んだ記憶をよみかえらせるとき、私は「二度と戦争は許せない」と叫ばずにはおれない。

私は自分の教え子や、子どもたちに、何が何んでも銃はとらせたことはない。たとえ警察になつても、戦争は反対する。そんな子どもになつてほしい、と思う。

言うべきことを言えず、戦前の軍国主義のもとで与えられた歴史と破壊への道をひた走りに走らされた、そんな父や母たち、先輩教師たちの暗い谷間の時代を再び許さないために、私はこの証言の記録をしたためておきたい。

(一九七七年八月六日)



あとがき

一 学生全体で取り組むこととした。父母の戦争体験を聞いて、の企画が、生徒諸君に理解され、父母の感情的な協力を得て、二二にそのなかのなものはありますが、一冊の文集となつて完成し、みなさんのお手許に届けることができて喜ぶことと、編集にたいすもつた者として、ますます喜びたいと思ひます。

切々と語る父に感涙している男子の生徒

苦難に負けぬ母に感動している女子の生徒

父母から聞く戦争中の話を聞く生徒の受け取り方は様々でした。

「生徒もよう書いたんぢやけえ、先生も書こうや」の呼びかけに快よく応じてくれた担任各位にも敬意を表します。

父母と同年代の教師の手記もあり、少年時代の苦しい思い出も語られています。

生徒のみなさんだけでなく、ぜひ父母の方々にも読んでいただければ幸いです。

二の冊子づくりが、平和への小さな歩みの一つになることと、これらは、この文集づくりの目的も達せられたといえるでしょう。

今は、本当に平和でしょう。もしそうであるならば、平和教育も平和運動もいらないうちがもしれません。私たちの生きる明日が、生徒たちにとって輝やかしい明日になるように、刀をいさま方を求めてゆきたいと思ひます。

一 感謝おねがいします。

二 協力ありがとうございました。

(編集者 代表)

昭和五十二年 八月六日 制作

編集 広高校 第一学年 担任会

発行 広高校 行 活 部